

# 新刊紹介

## 眞宗學史 鈴木法琛著

佛教大學叢書の第二篇として刊行されたもので、著者の佛教大學に於ける教案の發表である。第一編宗學開展史、第二編異安心史より成り、附録に西本願寺先哲の小傳が載せてある。宗學開展史に於て眞宗學が覺・存・蓮三師によつて創業され、西吟以下六代の能化によつて聖淨未分の曖昧期より漸次眞宗不共の宗義が開展せし跡を討れ、それより學轍が分裂して宗學がいよ／＼微より細に入れる事を述べてある。次に異安心史には元祖門下、宗祖門下覺存二師の時代、蓮師時代、能化時代、學轍分裂期に分ちて各々異安心を説いてある。斯書は眞宗學（殊に西本願寺に於ける）が辿つて來た跡を、要を取り簡明に叙べてある。斯學に裨益するものが多い。私に今斯書を一讀して思ひ付いた點を卒直に叙べるならば、第一に目に立つ事はその研究的態度である。從來の宗學者のまつた態度をその儘踏襲されて、所謂「法門の分際」を明めやうとする外に一歩も出て居らぬ事である。これを著者に望むは無理かも知れぬが、宗學といふやうな人心の内面的な跡を研究の對象とする學問には、もつと内面的なものに觸れなければならぬではな

からうか。既に著者自らも「教行信證の法門を研鑽して聖人の己證に觸れんことを示すを眞宗學と稱す」（三頁）といつてそれを認めて居らるゝが、さういふ態度は斯書に於て甚だしく缺如して居る。尤も教行信證を「法門」として見る事が既に「聖人の己證に觸れやう」とする豫想を裏切つて居るか、して、豫想が實現されないのも無理はない事ではあるが。從來の宗學がだん／＼世の中から葬られてゆくのは、かういふ研究的態度に禍ひせらるゝものが多いからであらう。こればたゞ著者一人に就いていふ事ではなく今の宗學者全般に對しての不満足である。次に宗派的偏見である。此點に就ても著者は心附いて居らるゝ事は「異安心史」に西吟法霖功存を異安心者に數へあるを指摘して「かゝる議論はなるべく派別文學轍の情を離れ最も公平に最も審査（？）に論ずべきものと思惟す」二四四頁を叙べてあるので明であるが、それにも拘らず本書異安心の場合に請求義を數へ、大谷派の學説をそれに擬し「亦是れ欲生歸命三業安心の餘毒の感染」と論斷して居らるゝのはどういふものであらう。其他大谷派に就て無雜作な論評を下して居らるゝ者一二にして足らず、今ばそれを一々擧ぐるに堪へぬこれらはいく宗派的偏見と見るより外はない。この偏見がまた宗學をいよ／＼いやなものとして了ふのである。いづれにしても宗學をして舊套を脱せしめて、ほんさうの意味の宗學の建設に就い

て努めなければならぬ。菊版三五四頁、價二、八〇、京都市佛教大學内六條學報社發行。(圓)

### 世界宗教一揆史 内藤智秀著

吾人は必ずしも宗教鼓吹を以て此の著の目的とするものではないが、唯だ其の各個人の心底に彷徨ついで居る宗教的分子を醒して、現在の社會問題解決の一助ともする事が出来るであらうと云ふ事を叫んで見たい。とは著者が本書の第一編緒論の第一節における結語にして此の著作的態度が知れる。而して本論に充つべき部に三編を分ち、即ち第二編日本に於ける宗教一揆には馬子と守屋、南部の僧兵と山法師、一向一揆、天草騒動、廢佛毀釋と三河一揆を挙げ、第三編支那及び其の附近の宗教一揆には黄巾の衆と清談の徒、白蓮教匪と天理教匪、長髮賊、及び回教徒の亂を數へ第四編歐洲に於ける宗教一揆には十字軍、フス戦争、ルーテルの宗教改革戰、聖パソロミューの虐殺、三十年戦争等を收め、先づ問題の採擇に遺憾なしと云へる。而して其の叙述は平明に、批判を加ふるどころ歴史の精神的解釋に富み、吾等の史觀に希求する哲學的考察の曙光を認むることが出来るのばうらしい。かくて第五編結論に來れば其所に著者の歴史に對する態度を窺ふに足る著者も恐らく茲に之を闡明せんとしたものであらう。曰く史實と

史觀、歴史哲學、二元論的史觀、唯物史觀、實證論的史觀、カント以後の史觀、人文哲學等の諸節に亘りて之を論究し、終に總ての科學の最終歸着、價值問題の決勝點は元より言ふまでもなく更らに主觀經濟の最終目的も共にこれ宗教にあることに及び、即ち精神と物質の兩方面の協働によつて更に幾多の世界的改造と、社會的整理とに向つて猛進すべきを力説し、一面には既に人間生活を研究對象とする經濟學が、人間生活の唯一方面たる物質的經濟方面のみを見ることの大なる誤謬なるを指摘し、他面に一は古來の宗教家が經濟の事を俗事として閑却せるに對し警告を與へて論結せるものである。因みに又著者は現代日本の輿論なるものは國民一般の熟慮の結果でなく、之を毒しつゝある者を數へて居る即ち歴史的知識の極めて貧弱な哲學の老書生並に青年學者、或は散漫な知識を土臺として大言壯語する政治家、或は唯だ危險なる直觀によつて社會を律せんとする實業家の一部、其他新聞雜誌の責任のない暴言等を挙げ、時代の要求する人物に謂ゆる歴史を哲學的に考察して立派な史觀を懷抱する文明史家にあることを告ぐるが如きは、恰も移して吾等の希念する所に係る。敢て我が讀書界に此の好著を推奨す。四六版三三四頁、價二、四〇、東京神田三崎町三ノ一友文社。(圓)

## ●佛像綜鑑 柴田常惠撰

佛菩薩等の彫刻繪畫の寫眞を輯むること百九十二、これを佛菩薩、天部、冥王、居士、羅漢の順に百九十二頁に配して頁毎に解題を附し、巻頭に簡單なる佛像概説を附す。國寶目錄、建築綜覽等と、もに座右に備ふべく極めて便利である。たゞ此書の解題並に編纂方法が儀軌的方面にのみ限られて、時代の變遷に觸れてゐないことは、美術研究者にとつて少なからぬ遺憾を感ぜしめる。別に頁毎に圖像を本位とした特色説明を附し巻尾に時代別索引を附せば、此遺憾は除かれたであらうと、便利な書であるだけに一入思はれるのである。ポケット型、價二、八〇、東京右文館發行(護)

## ●南都と西京 佐々木恒清著

題の上に「趣味の旅」と冠してあることが此書の性質を明かにしてゐる。従て學術的批判の對象となる書物ではないが、古美術研究の入門に志すには好適のものである。大體に於て奈良と京都の二部に分れ、奈良では興福寺京都では東寺が比較的詳しくかいてある。全篇を通じて著者の建築と彫刻に關する好尚があらはれてゐる。ポケット型、二二三頁、價一、六〇、東京右文館發行(護)

新刊紹介

## ●夜摩天宮會及其解説 佐々木月樵著

聖典研究は一方に於て科學的な考證、批判を待たなければならぬと同時に、直ちに教理そのもの、内的意味に就いての觀察が忘れられてはならない。此兩方面の研究が綜合融會せられつゝ、こゝに「文化の精髓」としての聖典に到達することは聖典研究の理想であるが著者が小乘經典に於て大乘經典の現實的教材を見出し、支那敎家敎相判釋の範疇に捕へらるゝこと無く、經典内容の綜合的史的研究より原始經典に顯はれたる釋尊自覺の核心が、大乘經典殊に華嚴經に於いて深化せられ、そこに根本佛敎精神の存するを極めんとせらるゝは聖典研究上注目せられねばならぬことと思ふ吾等は敎授によりて本書に提唱せられた結論即宗を試練するに因喻を以てし、學と敎との上からこゝに提唱せられたる宗を實證すべき責務を感ずる。

本書第一編「華嚴經の解説」によれば、隋唐以後華嚴宗の學者は華嚴經を以て因果爲宗、緣起爲宗、法界爲宗等と考察し佛陀自覺の開顯なりとは説いたが、其因果緣起なるものは正しく原始經典に現はれたる佛陀正覺の核心十二緣起に於て基調を見出し得るのであつて、華嚴經の即前篇(離世間品迄)は無明緣起の逆觀によりて成立したる悟界の光景即光明緣起、後篇(入法界品)は貪愛緣起

の逆觀によりて開顯せられたるものに他ならぬ。此は後篇の主人公たる善財及善知識が増一阿含四圓、一や説一切有部毘那耶藥事に於て歴史上の人物として屢現はれ、此等原始經典に於て與へられたる教材が云何に入法界品に於て深觀せられたるかに由りて明知せられ、又孔子章第四「梵漢同異義」の示す所により、梵本の組織に於て現に實證さるゝのである。

華嚴經に對する如上の見地から、第二編に「夜摩天會の解説」は展開せられた。今主要なる二三の項目に就て云へば、自然そのまゝが人格なる人法不二の世界夜摩天に於て、十林菩薩が釋尊を讚嘆した十林歌は、東洋思想史上彼「薄伽梵歌」已上に意味の有るものであるが、十林歌中大乘教學史上に永く其問題を殘したるものは如來林唯心歌の唯心偈殊に「心佛衆生是三無差別」の句である。無差別は、新譯の所謂無盡にして、第六法數林に於ける無盡の解説は實にカントールの學說を二千餘年前に想起せしむる、此無盡即分別理智の前には「空不可得」なる眞實法界を開く鍵が正しく夜摩天會の基調たる「十行」の敎説である。

次に論ぜられたるは、若し支那佛敎の特徴たる判敎の軌範を脱し經典中に於て菩薩聲聞等の活動を中心として考察するに本會の最初に佛に讚歌を捧ぐる功德林菩薩は、魏譯解深密敎第七に功德林菩薩同品として顯はれ、此功德林を中心として尙觀察を進むる

時は解深密經の前半は其内容に於て般若經と、後半は華嚴經四天主會と一致し唐代に賢首によりて龍天の論部を思索によりて外的に立證せられたる苦しき性相融會を用ひずとも其各々の家に於て依用せる經典の内容は必然的に性相の同源に立脚せるものたるのである。而して最後に討究せられた問題はカートハ、ウパニシヤツドに於てヤマ王に提出せられ、長阿含布吒婆樓經や中阿含箭喙經に於て釋尊に提出せられ、今亦功德林菩薩の十無盡藏中多聞藏にて解説せられた死後無のそれである。この難問に最後の解決を與へるものは天會に於て一貫せらるゝ布施波羅密であり、布施の行は能施者、所施者、施物共に空なる人法二空の天地に極はまる。そこには長へに生もなく死もなく唯恒轉如暴流なる不斷の相續あるのみ、是實に布施行が示す所の滅後無の解決である。而してそれは阿含經典に於て、迷の世界の第一原因たる無明が一たび智の光に照さるゝ時、其處に終りて起る所の識(者)、名色(物)未分なる行そのものが「明行」として示さるゝ境地に他ならぬ。

第三編は正しく漢譯夜摩天宮會の本文であるが、全文精細なる句點を施し各卷の初め、又は欄外に「見出し」を附せられた。昔時編纂せられ、組織せられたまゝに今日に及べる非科學的な組織の大藏經を藏することは、佛敎家が原典を有せざるにも等しく、從つて原典の提供は現代佛敎學界緊急の責務であるとは著者の常に

稱導せらるゝ所であるが今や「内外の學者心を東洋文化殊に日本の研究に注ぐべき」、「日本文化の母胎」たる佛教經典の「難解難讀なるを親し易く」せられた著者苦心の跡は此處にも明かに見らるゝ。四六版一七六頁、價一、五〇、京都護法館發行。(益)

### ■考古圖集 (第一三) 考古學會發行

本年三月以來東京の考古學會から毎月考古圖集なるものが刊行されてゐる。各輯十葉より成る菊版の寫真集であつて、ひろく考古學的分野に於て研究資料となるべきものを逐次網羅しやうといふ計畫である。かくの如き見地に立つて集められたものであるけれども、又佛の研究の立場よりこれを見るも參考となるべきものが少くない。思ふに考古學的の見地より東洋文明を見ても、その大半が佛教文化の遺物なることをこれによつて窺ひうる譯である。既刊三集の中で佛教關係の遺物として收められたものを擧げるならば(一)紀伊郡智發掘佛像(金銅の推古式觀音)(二)同彌勒菩薩像(三)同板佛(藥師像)(三)筑前志賀島神社藏朝鮮鏡(四)越前舟津村發掘經筒(五)山城醍醐三寶院藏鏡(六)筑前今津大泉坊藏經筒(七)肥後城泉寺九重石塔等である。(一)(二)(三)は推古式佛像として美術史上よりいつても大に注意すべきものであり、(五)の鏡は藤原時代のものであつて、その毛彫の彌陀三尊は當代の優秀なる一

作品たるべく(七)の九重塔は寛喜二年の銘を有し、鎌倉時代の地方的文化の遺物として尊重すべきものである。吾人は益々この計畫の健全なる發展を念じてやまないものである。(正)

### ■佛教美術 (創刊號) 佛教美術社發行

去る四月に發行さるべき豫定であつた佛教美術が五月十一日愈出た。かくの如き刊行物は從來あるべくして無かつたのであるから、吾人はその生誕を大いに祝福すると共に、その途者な生ひ立ちを大いに期待せざるを得ないのである。第一巻第一號を開いて見るに二十一人の執筆家によつて成るものを悉く網羅し原色版寫眞版を數多く挿入して居る。今吾人はそれら各専門家の發表を一々批評紹介しやうとするのではない。美術雜誌としての外的批評を少しく試み、意の有するところを告げて見たい。美術雜誌の大半以上の生命は、いふまでもなくその挿繪圖版にあるのであつて美術研究上の資料なるべく明細に、見るものをして宛も實物に對するが如き感あらしめるものでなければならぬ。本誌はその點に於て聊か物足らぬ感がするを、はじめに正直に述べておかう。本文も餘りに多くの顔を列べんとした爲に、窮屈な思ひがすると同時に讀者としてはあつけないのである。美術研究雜誌として立つか、書畫骨董賣買機關雜誌として立つか經營者の大いに苦心さ

れるところであらうが、吾人はその二重的性質を去り專一に佛教美術研究の指針とならんことを祈つておく、若し純正なる研究雜誌として月刊繼續が困難であるならば、季刊でも一年三回二回の發行でもよいと思ふ。要は研究雜誌としての生命の持續如何である。創刊に當つて聊か吾人の微衷を披瀝し、その發刊を賀すると共に本誌の將來を思ふて蕪辭を陳べた次第である。

(四六倍版。六册前金郵税共七圓、十二册前金同拾貳圓、京都市佛教美術社發行)。(泉)

### ◎最近佛教研究關係

#### 圖書論文一覽

##### ●圖 書

- 眞宗學史 (鈴木法琛) 京都六條學報社(價二、八〇〇)
- 科學上より觀たる極樂の實在 (伊藤圓定) 東京禪書刊行會(二、〇〇〇)
- 柱ぼさげの光 (稻葉道意) 鹿兒島大谷派別院(非賣品)
- 聖德太子と眞宗 (沼法量) 京都佛教學會(二、〇〇〇)
- 新譯本朝法華傳 (磯村野風) 大阪吉田書店(一、五〇〇)
- 佛像綜覽 (柴田常惠) 東京右文館(二、八〇〇)

##### ●誌

##### 誌

- 魚山精義 (上村敦仁) 東京西藏院(一、八〇〇)
- 慶念房の事蹟 (御橋義海) 京都大我堂(非賣品頒布上〇、八〇並〇、五〇〇)
- 日本佛教の大勢と興教大師 (鷲尾順教) 東京新興社(〇、二〇〇)
- 興教大師の法系 (富田敦純) 同 (〇、二〇〇)
- 南都と西京 (佐々木恒清) 東京右文館(一、六〇〇)
- 世界宗教一揆史 (内藤智秀) 東京天祐社(二、四〇〇)
- 夜摩天宮會及其解說(佐々木月樵) 京都護法館(一、五〇〇)
- 良寛和當遺墨集 (相馬御風) 東京春陽堂(三、〇〇〇)
- 仙岸禪師遺墨集 (富田溪仙) 東京巧藝社(二、〇〇〇)
- 舍衛城及び祇園精舎の研究 (赤沼智善) 佛教研究(一、一〇)
- 西藏喇嘛教史、一 (寺本婉雅) 同
- 觀心と觀佛 (稻葉圓成) 同
- 正安版生讚輿書を中心とする史的考察 (藤原猶雪) 同
- 佛教研究の革命的微光としての出定後語觀 上 (井上右近) 同